

## 天までとどけ

校長 武井 正明

今年もぎりぎりまで感動させてもらった。去年と違って今年はどんな音楽祭になるかは想像できる。だから全く不安はない。練習段階から、どっぷりと浸らせていただいた。この感動を、来場する多くの皆さんに味わっていただきたい。当日はもちろん大事だけれど、それまでの皆さんの一生懸命が、私は心から嬉しい。

そしていよいよ明後日、本番を迎える。吉中の皆の歌を聴かせてもらう時、いつも思い浮かべる顔がある。それはもう、きっと会うことは叶わないかもしれない、ずっと疎遠になっている中学時代の親友の、やさしい面影だ。

それはいつもの何気ない休み時間のおしゃべり。部活で、ふたりでストレッチで無理やり押す時の、いたずらっぽい顔。一緒に古町のスカラ座で「銀河鉄道 999」を観ながらおにぎりと菓子パンを食べた。

私が、友達の弁当を小馬鹿にしたときに見せた、私を叱る怖い顔。俺の全部を承知して、お前はいつも笑って受け容れてくれた。だから俺は今でも、会えなくても、やっぱりお前に会いたい。自分さえ、お前の手を離さなかったら、きっとお前との友情は、今でもずっと続いていたはずだ。今はもう、お前と最後に会った時のことさえ思い出せない。

～僕らの出会いを 誰かが 別れと呼んだ  
時は過ぎいつか 知らない街で 君のことを想っている～

何度聴いても、やっぱり親友の顔が浮かんでしまう。後悔と懐かしさとが込み上げてきて切なくなる。淳…今、どこにいる。

そして君たちは今、私も遠い日に過ごした、あの中学時代のど真ん中にいる。

先日ラウンドしながら、友が私にこう言ってくれた。「武井はいいなあ…。自分がやれなかった青春を、今、子どもたちと一緒にやっているなんて、二重に楽しいじゃないか」

そう。だから今年の音楽祭は、親友の顔を思い出しつつ、今、目の前の、光り輝いている君たちの顔を、昨年以上にしっかり見て、この至福の時間を愛おしみながら、全身全霊で聴かせてもらおうと思う。

親父おふくろ。本当にいい子どもたちでしょう。この歌声、天までとどけ。